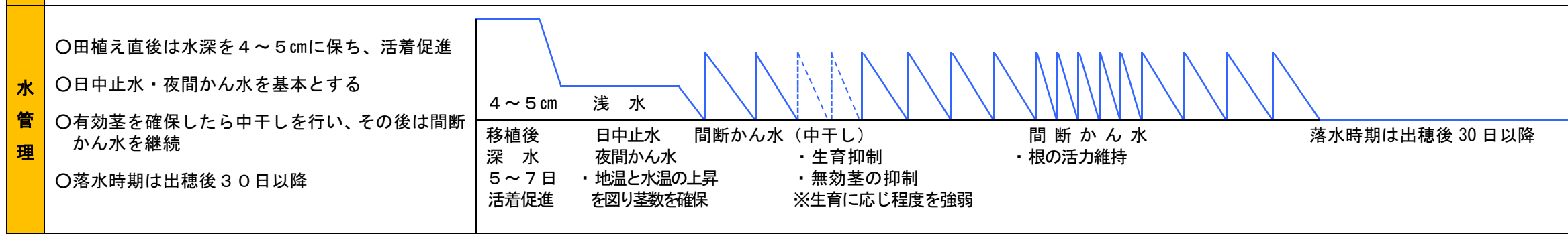


令和7年産 飼料用米多収品種「月の光」栽培ごよみ(普通植)

令和6(2024)年12月
安足農業振興事務所

月	~4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月														
	旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下														
生育段階・作業	耕起/代かき/田植え			田植え			最高分け時期			幼穂形成期			穂肥			出穂期			落水時期			成熟期			収穫期			立毛乾燥			秋耕		
	たい肥・土づくり肥料の投入/基肥施肥			除草剤散布			[出穂前日数と幼穂長]			[立毛乾燥]			できるだけ収穫時期を延長し、籾水分を低下させる																				
	床土準備/消毒/施肥 種子消毒/播種			病虫害防除(箱施用剤、本田散布) (ヒメビウンカ、イネツトムシ、斑点米カメムシ類、イネカメムシ※、稲こうじ病 等)																													



■暫定施肥基準 (10a 当たり)					■施用例 (10a 当たり)					
土壌改良資材	施肥体系	総窒素施肥量 (基肥+追肥)	基肥 窒素量	追肥		基肥肥料	基肥 施肥量	追肥肥料	追肥 施肥量	備考
				時期	窒素量					
完熟堆肥	分 施	10kg	7kg	出穂前23日	3kg	BB-F284	60kg	NK-205	15kg	土壌の肥沃度、前作、堆肥施用状況により施肥量を加減する。
1,000kg	全量基肥	7~8kg	7~8kg	—	—	BB飼料用米専用211	35~40kg	—	—	

【育苗】	【土づくり】	【田植】	■除草・病虫害防除での注意点■
1 種子の準備 ・種子量 3kg/10a ・種子伝染性病害防除のため、必ず種子消毒を実施する。 ・浸種水温 10~15℃ ・積算温度 100~120℃(未消毒種子) 120~130℃(消毒種子) 2 播種 ・乾籾で150g/箱以下 ・苗立枯病予防のため、床土消毒剤を使用する。 3 管理 ・午前中に控えめなかん水	・完熟堆肥 1,000kg/10a ・深耕 15cm以上を確保する。 【施肥】 ・分施 基肥7kg/10a+追肥3kg/10a ・全量基肥 7~8kg/10a ※多肥栽培に適するが、極端な多肥は避ける。	・栽植密度 18~21株/m ² (坪60~70株) ※1株穂数が少ないため、極端な疎植は避ける。 ・田植機のかき取り量を調節し1株当たり3~5本植え(株内のパラツキを少なくする) ・田植え直後は水深4~5cmに保ち、活着を促進する。	農薬はラベルの表示を確認して正しく使用する。 【除草剤】 ・田面を均一に保つ。 ・健苗の移植に努める(軟弱苗や極端な浅植では薬害を生じる可能性がある)。 ・強風下での使用を避ける。 ・除草効果を高めるため、散布後7日間以上水を保つ。 【病虫害防除】 ・発生予察情報に基づいた適切な防除を行う。

(参考)表 平成27年度「月の光」展示ほ生育調査データ(足利市)

品種名	移植日 (月/日)	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	千粒重 (g)	粗玄米重 (kg/10a)	倒伏程度
月の光	6/25	8/26	10/10	80	20.6	308	23.1	562	0

注)総窒素施肥量は、8.4kg/10a(ひとふりくん222:70kg/10a)
 栽植密度は、坪72株
 千粒重は、1.80mm 篩選による
 倒伏程度は、0:無、1:微、2:少、3:中、4:多、5:甚の6段階評価



栽培のポイント

- 品種特性**
 - ・縞葉枯病抵抗性をもつ。
 - ・いもち病に強い(あさひの夢と同程度)。
 - ・短稈で倒伏しにくい。
 - ・穂数が少ない。
- 深耕、土壌改良資材などによる土づくり**
 - ・深耕 15cm以上を確保する。
 - ・良質な完熟堆肥 1,000kg/10a 施用する。
- 薄播きによる健苗育成**
 - ・1箱当たりの播種量は乾籾で150g以下。
- 適正な施肥体系**
 - ・地力の低いほ場への作付けは避ける。
 - ・総窒素施肥量 10kg/10a を基本とし、地力などに応じて加減する。
 - ・全量基肥の場合、分施体系の総窒素施肥量(10kg/10a)から20~30%程度減肥する。
- 適正な栽植密度**
 - ・植付け本数は3~5本(平均4本)とし、太茎形成により登熟を高める。
 - ・栽植密度 18~21株/m²(60~70株/坪)
 - ・1株穂数が少ないため、収量を確保するために極端な疎植は避ける。
- 間断かん水を基本に、落水は出穂後30日以降**
 - ・有効茎確保後は間断かん水を基本に、中干しは生育に応じて程度を強弱する。
 - ・出穂後の異常高温時には、こまめな間断かん水により、地温の低下、根の活力維持を図る。
 - ・落水時期は出穂後30日以降を目安とする。
- 適正な病虫害防除**
 - ・発生予察情報に基づき、病虫害の防除に努める。
 - ※イネカメムシは、斑点米を発生させるだけでなく、出穂直後の籾を加害することにより、籾の不稔による減収を引き起こす特徴がある。
イネカメムシの発生が多く、被害が懸念される地域では、飼料用米を含めた水稲生産において、出穂期の防除を計画的に実施する。
- 収穫・乾燥・調製**
 - ・収穫適期は、穂首近くに緑色を残した籾が全体の10%程度になった頃以降とする。
 - ・立毛乾燥を行い、主食用米との収穫作業時期の分散と乾燥コストの削減を図る(倒伏、穂発芽、鳥害などに注意)。
 - 主食用米へのコンタミ(異品種混入)防止■
 主食用米と飼料用米を並行生産している場合、主食用米への飼料用米混入を防ぐために、以下の点に注意する。
 - ・種子の予措から移植まで、種や苗箱を取り違えないように注意する。
 - ・飼料用米作付ほ場の団地化及び固定化に努める。
 - ・品種毎に作業(田植・収穫・乾燥・調製)を分ける。
 - ・収穫・乾燥調製後、コンバイン・乾燥機・調製用機械の清掃を十分に行う。
 - ・飼料用米から主食用米に復帰する場合、漏生株や異株の除去に努める。